



罰ゲームで強制女装させられたあげく  
叔父さんに見つかって  
脅迫されたかわいそうなボク

# I

それなら俺の家に行こう、  
すぐ近くだからと叔父さんは言った。

『罰ゲームって言ったって…こんなのっあんまりだと思う…!』

はあっはあっはあっ

炎天下の中、ボクはほとんど駆け足に近いスピードで、駅前のコンビニに向かっていた。

駅への目抜き通りで、平日の昼間だというのに人通りが多い。

夏休みに入ってるから当然と言えば当然なのかもしれない。

ボクの顔は、熱中症と間違われてもおかしくないほどに真っ赤っ赤だ。

友人達のでかい笑い声が後ろからついてくる。

本当に罰ゲームを遂行するか見張っているのだ。

『駅前のコンビニまで…っエロ本を…買いに行く…っ』

はあっはあっはあっ

夏休みで暇だったのは事実だ。

桃鉄最下位のヤツには罰ゲーム、というのも了承した。

それがどうして、女装してエロ本を買ってくるという過酷なものになったんだろう。

なんだか、はめられた気もする。

そしてやつらが近くのしまむらで調達して来た衣装を見て愕然としたのだった。

